

39 歳

授業の始まりに何をするか

北海道野付郡別海別海町別海中央小学校 水野正司

◇授業の始まりに何をするか

◆ 11月5日（火）。今日1日、＜教師の方を向かせてから話す＞を意識してやってみた。

意識してやろうとしてすぐに困った。

いつそれをおこなうかという問題である。

授業の最初に「こちらを向きなさい」と言うのか。

向山氏はどうだったか。

もはやわからなくなった。

「じしゃく」の授業記録は8時間分出ている。

その8回の授業の最初の言葉をここに抜き出してみよう。記録はすべて新牧氏による。

- (1) 今日から理科の新しい勉強をします。(2/19)
- (2) 理科の道具を出しなさい。(2/21)
- (3) ついた、ついたという線ですよ。(2/23)
- (4) はい、じゃ、乾電池の用意をしなさい。(2/25)
- (5) (記録なし)
- (6) じゃ、手に持っているもの、全部下において。(3/2)
- (7) じゃ、手には何もさわらないで、佐藤さん、手には何もさわらないで、まりちゃん、先生の方、向いて。(3/4)
- (8) 手に持っているもの、おいて。(3/5)

◆ (2)(3)(4) はいきなり行動をさせる指示である。単元の前・中盤なので学習が展開しているときなのだろう。

(6)(7)(8) はそのあとに教師の話がくる。だから話を聞く姿勢をつくるために、手に持っているものを置かせたり、先生の方を向かせたりしているのだろう。

授業の始まりに活動があるのならすぐ活動させればよい。
説明が必要ならば教師の方を向かせてから話す。

考えてみれば当たり前のことである。

さて私は何をしたか。

一時間目は国語であった。漢字のフラッシュカードから始めた。

「林_g」というカードを出して、「読みます」と言う。

子どもたちが「はやし」と読む。

授業の始まりが活動なのですぐ活動から始めたわけである。

しかし、このときまだ授業の準備ができていない子が数名いた。

席についていない子2～3名、あわせて5～6名の子がこちらを向いていない。加えて声を出していない子が数名いる。つまり、授業に入れる状態ではなかったのである。なのに（だから）、活動させてみた。多くの子が「はやし」と読んだことによって、あわてて席に戻った子がほとんどである。

しかし、さっきの「林_g」は全員が読んだわけではない。このまま次のカードへ進むか。もう一度やり直しさせるか。

<教師の方を向かせてから話す>というのは、全員に話を通すためである。

ならばここは、全員に活動を保障しなければいけない。参加できなかった子はそのカードの練習を1回分損したことになる。

私はやり直しをさせた。

「読んでなかった人がいます。もう一度」子どもたち、「はやし」

これでほとんどの子が読んだ。

しかし、まだボケッとしていて参加できなかった子がいた。

◇どうやって全員を参加させるか

◆ここで私はその子に向かってこう言った。

「H君、こっちを向きます」

注意を促したのである。これはよかったのか。

今思えば少し違うような気がする。

ここは、<こっちを向きなさい>という注意ではなく、「H君、もう一度」と言ってH君に読ませるべきだったのではないか。

注意に要する時間はどちらも同じくらいである。

「H君、もう一度」と言って読ませればH君の練習になる。

「H君、こっちを向きます」ではH君の練習にはならない。

いいようできて全く別の指示である。

なぜこう言ったのか。

原則を踏みはずしたのだ。

「読みます」と言ってカード（漢字）を読む指示を出したのである。

読んでいない子がいたので「もう一度」と言ったのである。
それでも読んでいなかったH君には何と云えばよいのか。

その子の名前を付けて指示をくり返す。

これである。

No.5で分析したばかりではないか。

「H君、もう一度」

これでいいのである。

◆さて、これが逆ならどうか。

活動から入らないで、全員が教師の方を向いたところでカードを見せる。

これならどうか。

これは多分、「全員先生の方を向きなさい」「もう一度言います。こちらをむきなさい」「H君、先生の方です」というような指示から始まり、そろったところで「読みます」と、カードを提示するのだろう。

これも良さそうな方法である。

しかし、何かが違うような気がする。

どうせ活動に入るのなら初めから活動をさせた方が得なような気がする。

「読みます（読みなさい）」という指示には「授業に参加するんですよ」というメッセージも含まれている。活動が指示されたのなら参加のための姿勢をつくらなければならない。だから「読みます」のひとつで十分なのだ。指示が出たのに出遅れる子は、それは仕方ないのである。「全員先生の方を向きなさい」という指示でも同じように出遅れるはずだ。つまり、どちらにせよ待たなければならないのである。同じ待つならどちらを選ぶか。黙って待つか、活動しつつ待つかである。

今日の私は、すでに態勢の整っている多くの子を相手に活動に入った。

遅れた子はそのあとで参加させた。

その方が、一刻も早く授業に入った方が、授業に勢いが出て乗りやすいのである。

活動から授業に入って、活動させるなかで全員参加を促す。

こういう方法もあるわけだ。

ただしこれには条件がつく。やり直し、くり返しがすぐにできる活動でなければできない。説明の前に教師の方を向かせてから話すのは、その説明は一度で済

ませた方が効率よいからである。

◇全員の原則

◆これはつまり「全員の原則」である。

一見めんどろなようでも、指示は必ず全員に伝えなければならない。

『授業の腕をあげる法則』32ページである。

「ところが指示をした後、行動させると何人かの子が聞いていないということがおこる。ほとんどの場合、教師はそれを子どもの責任にする。だが、これは教師が悪い。責任は教師にある。」

だから向山氏は、「じしゃく」の授業においても、あのようにくどいくらいに、教師の方を向かせてから話をしていたのである。

◆教師の方を向かせてから話す。

これだけのことで私に身につけていないことが沢山出てきた。

何しろ今日は授業のとお始めから困ってしまったのである。

その途中でも当然困る場面が出てきた。

今度はそのことについて書く。

それは、<指示の言葉が出てこない>ということである。何と言っていいのか困ってしまったのである。

物を置かせるときは何と言えればいいのだろう。

「手を置きなさい」

「手はおひざ」

「手はひざの上」なにか違う。

「持っている物を置きなさい」

さて、どうしよう。こっちを向かせるときは何て言うんだっけ？

「こっちを向いて」

「こちらを向きなさい」

「顔を上げて」

「先生の顔を見なさい」なにか違う。

向山さんは何と言ったんだっけ？ 根本氏の分析を読み直す。

- 1、前を向いてごらんください。(授業の最初)
- 2、先生の方を見なさい。

- 3、おへそを先生の方にむきなさい。
- 4、向山先生の方、向いて。
- 5、先生の方、むきなさい。

向山氏は「先生の方」を愛用しているようだ。
私もマネさせてもらおう。

- ・鉛筆を置きなさい。
- ・机の上の物をしまいなさい。
- ・先生の方を向きなさい。

私の場合は、今の1年生を相手に、この3つを愛用することになりそうである。
この他に「聞く姿勢をつくってごらんなさい」というのも考えたが、どうも上の3つとは種類が違う気がする。何が違うのか。

〈聞く姿勢〉というのは曖昧な言葉なのである。

その点、〈鉛筆を置く〉〈物をしまう〉〈先生の方を向く〉は具体例だ。具体例だということは行動に移し易いということだ。

〈聞く姿勢〉だって行動には移せるだろう。いちいち具体的に言わなくても姿勢はつくれると思うし、言葉も柔らかくていいような気がする。

◇指示の言葉

◆「聞く姿勢をつくってごらんなさい」

このような指示を向山氏は出さない。

「先生の方、向きなさい」

「先生の方」ばかりである。なぜか。

子どもが行動に移しやすいというものもあるだろうが、それ以上に大切なのは、教師にとって確認しやすいということなのだ。

No.5で昨日書いたばかりではないか。「確認をしている」と。

〈聞く姿勢〉と言っても人によって解釈は異なる。なかには耳だけで姿勢をつくる横着者もいるかもしれない。屁理屈を言わせたら教師より上という子はザラである。教師が統率力を持つためにはそんなことさせてはいけない。

「聞く姿勢をつくってごらんなさい」

こんな甘い指示ではダメなのである。特に若い教師は。

〈鉛筆を置く〉〈物をしまう〉〈先生の方を向く〉

全部確認可能な指示である。

確認可能な指示を使う。

まず全体にこれを出し、できていない数人には（できなくて当然）、その子の名前を付けてくり返す。

これが先生の方を向かせる技術の奥義である。

ちなみに、手に持っている物を置かせるときの向山氏の指示を再度見直してみよう。

- 1、手に持っているものを全部、机の上に置きなさい。
- 2、物を全部、置きなさい。（おへそを先生の方に向けなさい。）
- 3、手にある物を下に置きなさい。（向山先生の方、向いて）
- 4、手に持っているものを置きなさい。（先生の方向きなさい。）
- 5、古賀君、えんぴつを置いて。
- 6、青木功太君、えんぴつを置きなさい。

見事である。

根本氏はこの授業分析を次のように書き始めている。

教育技術法則化運動千葉弥生会 No.162

1985.2.21

「向山先生の理科の授業を参観して」

1.

夢にまで見た向山先生の授業を参観できた。著書、雑誌で何度も強調されていた、「プロの腕」を見ることができた。

見事であった。

さすがはプロである。

チャイムの鳴るのと同時に始まり、チャイムと同時に終わった。目標がきちんと達成された。発問、指示が適切であった。一人ひとりへの評価がされていた。

子どもが自分の力をすべて出し切った。もっと勉強したいという。

なぜこんなに子どもが生き生きと動くのか。

それをこれから分析していきたい。